

目次

|                                |         |
|--------------------------------|---------|
| 第15回大会開催案内                     | 大会実行委員会 |
| 報告「幼児教育史学会15周年記念出版」について(趣旨文)   | 学会編集委員会 |
| 寄稿 キリスト教とフレーベルと幼児教育をめぐる幾重もの不思議 |         |
|                                | 宮澤 康人   |
| 投稿 陳鶴琴の次世代を悼む 北京・香港—おふたりの陳老師   | 一見真理子   |
| クリップボード この夏の関連イベントご案内          |         |
| 新入会員・会員異動 / 寄贈図書               |         |
| 事務局からのお知らせ                     |         |

第15回大会開催案内

2019年12月7日(土)東京都小平市の白梅学園大学・短期大学で、第15回大会を開催いたします。

白梅学園は、1942年に現在の東京都文京区白山(旧小石川区指ヶ谷町)に設立された東京家庭学園に始まり、設立の母体の社会教育協会の理事長・穂積重遠(元東大法学部長)が初代学園長を務め、常務理事は小松謙助でした。建学の理念として「ヒューマンイズムの精神」を掲げ、女性の教養や家庭における実際的技能を、科学性、社会性、芸術性を重視した理念や方法に基づき教育活動を展開してきました。

1950年に附属白梅幼稚園設立、1953年には社会教育協会から独立して学校法人白梅学園を設立。同時に、小林宗作(「窓ぎわのトットちゃん」に登場するトモエ学園長)が関わった厚生保母学園の事業を継承する形で白梅保母学園を設置し、1957年から白梅学園短期大学となりました。

以来、保育者養成校として全国へ保育士、幼稚園教諭を輩出し、「保育の白梅」として広く全国に名を馳せてきました。その後、短期大学には専攻科、心理学科、教養科、福祉援助学科が設置されました。

1963年に武蔵野の面影が残る現在の地、小平市へ移転を開始し、2005年には白梅学園大学子ども学部を設立。2008年からは大学院子ども学研究科も開設しました。小さな大学ですが、「ヒューマンイズムの精神」に基づき、社会に貢献する意思をもつ人材の育成を基軸に教育活動を展開しています。同時に、子ども学の深い追求を目指し、独創的アプローチによる研究活動にも挑戦しています。シンポジウムはこうした蓄積を踏まえた内容を企画しています。皆様のご参加をお待ち申し上げます。

(第15回大会実行委員長：師岡 章)

大会開催要項

1. 期日：2019年12月7日(土) 大会  
2019年12月8日(日) 関連企画
2. 会場：白梅学園大学・短期大学  
(〒187-8570 東京都小平市小川町1-830)

3. 大会日程(予定)：  
9:30～ 受付  
10:00～13:00 研究発表  
14:00～16:30 シンポジウム  
16:45～17:30 総会  
18:00～20:00 懇親会

#### 4. シンポジウム

テーマ：「子どもの遊びが生まれるとき—  
よみがえれ、文化のカー（仮）」

企画：首藤美香子（白梅学園大学 子ども学部）

司会：長井 覚子（白梅学園短期大学 保育科）

登壇(予定)：

浅井 幸子（東京大学 教育学部）

周東 美材（大東文化大学 社会学部）

首藤美香子（白梅学園大学 子ども学部）

##### 〈趣旨説明〉

子どもが「遊ばなくなった」「遊べなくなった」といわれて久しい。だからなのか、保育や幼児教育の現場では、遊びの重要性が強調され、子どもの自発的で自由な遊びを、発達や社会化を促すための学習体験になるよう方向づける取り組みがいつそう求められている。だが、子どもにとって遊びの意義や魅力は、こうした教育学的、心理学的観点にとどまるものではなからう。

今回は、子ども期の「文化としての遊び」に注目し、児童文化がひとつのジャンルとして確立された大正・昭和初期における子どもの生活と遊びの記録、遊び論、消費文化に注目し、音や声、語り、デザインや色、手触り、におい、味わい、動きが子どもの感性と想像力、創造性をどう育もうとしてきたかを探り、子ども期の遊び世界の豊かさと変化の諸相を読み解いてみたい。

#### 5. 大会参加費・懇親会費

- ・大会参加費：会員・非会員1,000円／院生無料
  - ・懇親会費：会員・非会員5,000円／院生3,000円
- ※前納方式は採りませんので、当日受付でお支払い下さい。

#### 6. 研究発表の申し込み

##### ① 申し込み方法

第15回大会の申込書は、学会HPからダウンロードできます。9月9日（月）までに記入済みの「研究発表申し込み書」を、電子メールに添付して学会事務局へお送りください。

- ・宛先：admin@youjikyokushu.org
- 数日以内に到着確認メールを返信します。

##### ② 発表資格

- ・一般会員：申し込み時に年会費を納入済みのこと
- ・新入会員：申し込み時までに入会手続きを終え、年会費を納入済みのこと

##### ③ 発表時間

一人（1グループ）あたり30分（質疑応答5分を含む）を予定していますが、変更する可能性もあることをご了解ください。

##### ④ 発表受付手順

学会事務局で申し込みを受領した後、理事会にて発表内容を検討します。その結果、発表数調整のため、個別に連絡を差し上げる場合があります。理事会で発表者を確定した後に、大会実行委員会から発表要旨集の執筆要領を送付します。なお、発表要旨集の原稿提出締切は11月14日（木）の予定です。

#### 7. その他

① 白梅学園大学へのアクセスは、JR 中央線「国分寺駅」で西武国分寺線（東村山行）に乗り換え「鷹の台駅」下車、徒歩 15 分です。なお、キャンパス内には駐車場はありません。学園 HP:

<http://www.shiraume.ac.jp/accessmap/>

② 12月7日（土）は生協のカフェテリア食堂が11:00～14:00まで営業していますが、8日（日）はすべて閉店しておりますので、最寄り駅のコンビニ等で事前に昼食をご用意ください。

③ 懇親会は大会会場の近隣を予定し、送迎バスにて移動します。詳細は当日ご案内いたします。

##### <関連企画>

翌8日には、例年の「海外の幼児教育史の研究動向を愉しみながらフォローする会（通称「タノフォロ会」）」に替わり、「学会 15 周年記念事業に関する小報告会」を予定しています。詳細は大会プログラムでお知らせします。あわせてのご参加をお待ちしております。

##### <問い合わせ先>

〒187-8570 東京都小平市小川町1-830  
白梅学園大学子ども学部 師岡章研究室気付  
幼児教育史学会第15回大会実行委員会

電話：042-346-5636

E-mail：morooka@shiraume.ac.jp

## 幼児教育史学会15周年記念出版について(趣旨文)

幼児教育史学会理事会は、理事を中心に15周年記念出版編集委員会を組織し、これまで編集の方針、内容、体制の検討、出版社との交渉を行ってきました。以下は、同編集委員会の提案する編集の〈趣旨〉です。今後、第15回大会総会時のご報告と翌日の「学会15周年記念事業に関する小報告会」、あるいはその後の研究会などを経て、いっそう具体化してまいりたいと思います。

いま幼児教育の世界は、激動を潜り抜けようとしている。どのようにしたら社会全体に幼児教育と保育の一元的な理解が浸透するのか、無償化の先に義務化が検討されるとしたら、その根拠をどのように理解するか、また小学校教育と幼児教育の関係について、さらには営利を目的とする企業の保育事業への参加についてどのように問うか。幼稚園令制定から約100年、戦後の学校教育法、児童福祉法制定から約70年、幼稚園と保育所はそれぞれが制度として確立して以来の大きな改革期を迎えている。

いっぽう、私たちが研究方法として依拠する歴史研究の分野でも、歴史学がいくつもの新しいチャレンジを生み出して大きな転換をとげようとしている。民衆史、社会史、さらにはグローバル・ヒストリー、それぞれの挑戦は重なりを持ちつつ、独自の主張をもって、歴史学の大きな転換を生み出しつつある。

私たちは幼児教育を歴史的な方法で分析研究する小さな学会である。しかし女性の社会参画と家族の変化、人格の土台としての乳幼児期への注目、教育への市場原理の浸透など、研究者として社会に対する責任を問われる問題群に直面し、自らの研究を厳しく鍛えねばならない立場に置かれてきた。学会として発足十五年のささやかな歩みではあるが、積み重ねてきた議論をここで書物(論文/コラム集)として出版しようと考えている。

学会なので、思想信条、したがって研究の戦略も様々な構成員が研鑽のために集っている。そのなかで今回の記念出版では、以下の2点を共有し立脚点とした。

第一には、一国史を相対化してみることである。教育史研究でも、21世紀に入ってようやく比較教育史や交流史研究が積極的に取り込まれるようになった。現代の幼児教育は国連や

OECDなどの積極的な関与もあって、国際的な影響関係のなかで制度も思想も展開している。こうした時代にふさわしいグローバルな視野からの歴史研究を心がけた。また、グローバルな視野からナショナルな教育史を相対化することは、特に日本をフィールドにした研究者がローカルな視野からナショナルな教育史を相対化する試みとも対応している。足元の先人の営みを世界的な時間軸、空間軸のなかに位置づけてゆくよう努めたい。

第二は、そのような視野から時期区分を設定したことである。上下2巻に分け、それぞれをおおよそ3つの時代的なテーマで区切って全体を構成した。

上巻では1)19世紀以前、2)近代幼児教育制度形成期、3)1920年代以降の学校教育改造運動と保育施設の成立の時期を、下巻では1)1930年代後半から1950年代までのファシズムと戦争に対する反省と改革の時期、2)1960年代以降の科学化と教育内容の改革期、そして3)1990年代以降のECCE/ECECの成熟期である。国によって地域によって、時期のずれはむしろテーマを優先して弾力的に区切ることにした。時期区分のなかにその時期のテーマが明確に浮き上がることを期待している。

この構成を考えるなかで、編集委員会は幾度となく全体でまたグループで議論を交わしてきた。この討論の過程、編集の過程が学会としての研究の深まりに転化してくれることを祈っている。忌憚のないご意見、ご批評をお聞かせいただきながら、学会としてこの難しい時代に応えられる内実に近づいてゆきたい。

2019年5月  
幼児教育史学会15周年記念出版  
編集委員会一同

**寄稿** 宮澤康人会員より、前号入稿後に、第14回大会(関西学院大学聖和キャンパス)の参加にもとづくエッセイを頂戴いたしましたので、本号に掲載いたします。

## キリスト教とフレーベルと幼児教育をめぐる幾重もの不思議

宮澤 康人 (大人と子供の関係史研究会)

大会前日の、聖和幼稚園の見学は、わたしにとって愉しく有益でした。日本でも指折りといわれる広い敷地の庭には、丘あり池あり、種々に色づく樹木々がごく自然に植えられ、遊び小屋も遊動円木もそれに合わせて、地味な自然色でした。そしてなにより、その中を活発に飛び回るこどもたちがとても人懐こいのです。今からでもこどもになって入りたくするような幼稚園でした。

ところが園長先生は、「自由」保育という言葉は嫌い、レジオに似ているとみられることも嬉しくないというようすで、あくまで「キリスト教主義」保育だと、主張されました。

そのことに絡んで、かねてから私が漠然と疑問におもっていた、キリスト教と幼児教育の結びつきの在り方について書きたくなりました。わたしは、信徒ではありませんが、キリスト教には、かなり強い関心をもっています。問題は複雑で、しかも深いところにあるらしいので、短いスペースで、明確に、わかりやすく提示するのは困難ですが、あえて論点を二つに単純化すると、こうです。

1) 子供観において、一神教、父性原理のキリスト教とフレーベルの思想の汎神論的、母性原理(と決めていいかも問題ですが)の間に、ずれというより、むしろ対立はないのだろうか。幼稚園教育は発足の当初からフレーベル主義を広めるミッションのように見えていましたから。

2) その上、キリスト教そのものの内部において、父性原理と母性原理の対立、葛藤があるのではないか。

この問題に関わって、私はかつて「キリスト教における<神イメージ>の両性具有と父子関係」という論文を書いて考えました(『放送大学研究年報 21号』(2003))。マリアと聖母子の像を祭壇の正面に飾る聖堂を訪れるたびに、カトリックは実はマリア教なのではないか、という疑念が去りません。私にとってこれは、いまだに決着はつかない疑問です。

ところで、『イエスは仏教徒だった?』という衝撃的なタイトルの本をご存知でしょうか。原著は、1994年に刊行され、著者は二人のドイツ人研究者、一人は心理学博士で、同時に比較宗教史を研究テーマにしています。もう一人は、神学と教育学を修め、やはり宗教史の著作が多い、と紹介されています。この本は、邦訳の副題には「大いなる仮説とその検証」とあるように、あくまで学問的に探究する姿勢に貫かれていて、決して、トンでも本の類のものではありません。原タイトルは、DER UR・JESUS となっていて、神学上のイエス、歴史上のイエスが出現する前提に、<イエスの原型・原イエス>(Ur・JESUS)なるものへの信仰が生成していた背景を示そうとします。ちょうどゲーテの『ファウスト』の背景に、数多くのファウスト伝説(Ur・Faust)があったという文学史上の通説などに対応します。

ちなみに、『イエス・キリストは実在したのか?』のようなイエスの歴史的事実像を追求した歴史学的研究もあります。著者は、レザー・アスランというイスラームの歴史学者で、本の原タイトルは直訳すれば、『ナザレのイエスの生涯と時代』です。それは、ユダヤ民族をローマ帝国から解放するために戦い、敗れた革命家こそがイエスの実像であるという解釈を、聖書外典などの文字資料と、当時の民族間の政治状況を丹念に検討して裏付けようとしています。前述の『原イエス』が描くイエス像は、それとはまったく違う内容ですが、方法論的にも違います。歴史学というより歴史人類学的な著作といったほうがいいでしょう。

日本でも、かねてから、井上洋治神父が、イエスをユダヤ教の宗教革命者にとらえ、ユダヤ教の、厳しく罰する神に代えて、やさしく許す<母性的>とさえ言える父なる神(アッパ)を提示したことはよく知られています。それによって、キリスト教を日本人の感覚に合うような信仰に転換しようと図ったのでした。井上神父は、カトリックを浄土宗ふうに修正したと批判され、異端という烙

印を押されそうになったこともありました。

たしかに、仏教の中の、「草木国土悉皆仏性」という思想や、阿弥陀如来や観音菩薩の母性的寛容、さらに生きとし生けるものへの共感と畏敬の汎神論的感覚に思い至ると、少なくとも井上神父ふうのキリスト教は、仏教と親和性があるように見えます。イエスの宗教改革、神イメージの転換に仏教の影響が及んでいたという説には根拠がないとは言い切れないものを感じます。

その上、イエスを取り巻く同時代の宗教の状況証拠として、すでに仏教が景教とかといわれる形でアレクサンドリアにかなり浸透していたという事実があります。そして、大工の子であったイエスが、アレクサンドリアに職人遍歴した可能性は十分あることなどがあげられます。そこで、仏教の思想に触れたとしても、少しもおかしくはありません。

私としては、この問題を、歴史的にせよ、歴史人類学的にせよ、専門的に検討する余裕も力量もありませんが、キリスト教とフレーベルと幼児教育の基底には、＜キリスト教の普遍性と特殊西洋近代性＞、＜西洋近代の子供観や日本の子供観の独自性と子供観の人類普遍性＞、＜子供観の背景にある汎神論＞、＜子供崇拜の人類普遍性＞といった、大きくて重要な問題が横たわっています。

こういう文脈を意識して、幼児教育史の個別問題の解明に向かうことは、私の見るところ、＜子育て文化の巨視的比較史＞という研究枠組み構築へと向かいます。まさしく、かねてマックス・ウェーバーが、「世界宗教の経済倫理」というキーワードで、近・現代世界資本主義文化の成立の背景を批判的に解き明かそうとした野心に匹敵するような、人類史的研究課題に通じると思います。

## 投稿

### 陳鶴琴の次世代を悼む

### 北京・香港——おふたりの陳老師

一見真理子（国立教育政策研究所）

中国の「幼児教育の父」とされる陳鶴琴(1892~1982)と妻・俞雅琴の間には7人の子女があった。長男・一鳴（中国初の誕生時からの父親による縦断観察記録の対象として著名）、長女・秀霞、次女・秀瑛、三女・秀雲、次男・一飛、三男・一心、四女・秀蘭。当時としては進歩的で開けた家庭、そして心理学者の父親が観察や実験のために創設した家庭幼稚園という恵まれた環境できょうだいは育ち、やがて父親の経歴の変化とともに一家の拠点は南京市街~上海の共同租界~奥地の江西省~戦後は上海~そして南京へと移動し、それぞれが巣立ってキャリアを形成している。ファミリーヒストリーの研究対象としても興味深い事例がこんなに身近にありながら、私はなんと「ボーッと生きてきたのだろう」とあらためて思う。インフォーマントの存命中に調査をしないと研究は間に合わない！という調書をしたためればおそらく科研費も獲得できたかもしれないのに、何と勿体ないことだったろう。そのうちきっとと思ううち、長男一鳴氏、次男一飛氏もすでに故人となり、

2017年12月28日には、最も交流のあった三女の陳秀雲さんも父親と同じ90歳で亡くなられた。謹んでご冥福をお祈りしたい。

本職を得てから陳鶴琴研究になかなか専念することのできなかつた容量の乏しい私は、中国での生誕95年、110年、120年、125年…といった周年行事に参加したり招かれたりするたびに「どうか皆様の手で、存命中の関係者にできるだけのインタビューをするなど貴重な資料を集めておいてください。公開の進む各地の公文書館にも眠っている資料がきっとあります。私たちあとに続く者、海外にいる者もそれを参考にし、検討しますから」と懸命に訴えることと、陳鶴琴の教育思想が今の眼でみても古びるどころか学ぶことの多いことを日本や世界の動向と絡めて事例で示すことがせいぜいだった。そして昨今では、若手だと思っていた自分自身が親の介護や看取りをする年代にさしかかり、いのちのリミットにも日々思いをいたすようになっていく。「研究というものはできるときに一気呵成にしておくものだ」と痛感する反面、それ

でも今ここからできることをあきらめずに取り組みたいと、以上のような状況の中で気持ちを立てなおしつつあることは、14回大会での駆け込み発表の中でも触れさせていただいた。

さて、日中戦争のさなかに父親やその学生たちとともに疎開先で造成した山奥の学び舎＝多くの人材を輩出した幼児師範学校にそのまま入学して10代前半を過ごし、また父親を手伝って農民子女のための保育実践を休暇中に行うような青春を過ごした三女の秀雲さんは、きょうだいの中で唯一、行政職や外交官、エンジニアや医師といった専門職ではなく教育の道に直進した。結果的には大学進学を果たしたため当時の制度上、幼児教育ではなく中等教育の教員となり、中華人民共和国の建国後の学制改革という課題に向かうよう北京市内の実験中学校やナンバーズクールに配属され、組織能力を発揮して校長から党書記へ、という立場で定年を迎えている。退職後は北京市の要請で陳鶴琴教育思想研究会の卓越したオーガナイザー(副理事長)として市の教育研究所に籍をおいて、80年代から21世紀初頭の全国の陳鶴琴研究を一貫して支え、選集や全集の編纂に従事するなど、今日の研究の基礎を築かれた。

私が30年以上前に博士課程在学中に北京留学したばかりの頃、日本から研究者の卵が来ていると聞きつけて大学宿舎を自ら訪ねてくださるような気さくで飾り気のないあたたかいお人柄で、まさに北京のお母さんの存在であった。院生時代の私の書いた拙い論考を、中国からみて新鮮な観点と示唆に富んでいるときょうだいそろって励ましてくださり、晩年に至るまでご一家でいつも心にかけていただいた。

さて、秀雲老師(せんせい)のパートナーの柯先生は、現役の外交官で1997年の香港返還前の折衝役を任命され、ご夫妻は香港に移られた。そのことが新たな機縁となって、ここにもうひとりの陳老師(せんせい)が私の視野に入ってくる。2002年、陳鶴琴生誕110周年のシンポジウムが福建省の廈門市にて盛大に開催され、私は何とか参加だけは果たすことができた。その時、返還5年目の香港から陳鶴琴教育思想を学びに大挙しての参加があり、グループの中心に

いた最年長でにこやかな女性が陳淑安先生だった。香港で長年保育者養成に携わり、米国留学を経て児童中心の「活動課程」を提唱していることでも知られる方だった。英領香港の終焉とともに、幼児教育のアイデンティティが問われていた時期で、香港での「両文三語」(英文中文2つの書き言葉と英語・北京語(普通話)・広東語3つの話し言葉)という言語環境が幼児期の教育に与える圧力についても教えてくださった。階層差のある幼児期の言語習得状況とも苦闘してきた淑安先生にとって、秀雲さんがもたらした陳鶴琴の教育思想は相当に琴線に触れるものだったようだ。香港にこそ、このようなバックボーンが必要と思われていることが痛切に伝わり、一歳違いの二人の老師は出会うべくして出会い、盟友となったのだと思った。

廈門での会期中、淑安先生はなぜか日本から参加した私に格別な関心をもって接して下さり、その訳は最終日、廈門出身のシンガポールのゴム王として成功した華僑・陳嘉庚の出資で創設された集美学院の見学の帰路、壮麗な学園村の水辺を並んで歩いていたときにわかった。淑安先生は、突如意を決したようにたどたどしい日本語で「ワタシノ日本ノ名ハ安子、ヤスコデス。ワタシノ…オカアチャンハ、ニホンジンデス…」と打ちあげられたからだ。その後、淑安先生の母上父上のルーツ探しをめぐって、はからずもいろいろとこちらにも動くことがあり、最晩年には香港・台湾・アメリカに住むごきょうだい全員が長姉の陳先生を囲むように日本に来られ、両親ゆかりの地を探訪されるのを大和洋子さんとともにご案内した。辛亥革命期に日本留学された革命家の父上は東京で母上と出会い、国際結婚家庭を作って大陸に渡り、離合集散を繰り返しつつ台湾で終戦を迎えている。幼子の頃に母の膝で聞いたピアノが幼児教育にむかった理由とおっしゃる一人の女性が、香港の幼児教育界を背負って立つまでになるめぐりあわせには正直関心をそそられ、香港の関係者さんたちには幼児教育史解明の一環として淑安先生の自伝を可能なかぎり早く編纂してほしいと同じようにまたお願いしている自分がいた。日本ツアーを最後に渡米された安子・淑安先生は

2016年1月1日に安らかに息をひきとられた。  
陳鶴琴とたとえば張雪門など中国近現代を代表する幼児教育家とその次世代の方々が残して

くれた貴重な文献や記録が今、私の手元と職場の図書館にはある。それらを今後日本からどうあらためて読み解くかが問われている。

**クリップボード** この夏の関連イベントをご案内します。

◆ 「グローバル・ヒストリーと国際日本学」(お茶の水女子大学第21回国際日本学シンポジウム)

\* 幼児教育史学会 15周年企画の関連イベントです。

・日時:2019年7月6日(土)11:00~17:30 ・会場:お茶の水女子大学本館 306室

☆ 午前の部(11:00-12:15)講演:ジョン・ピジョー(南カリフォルニア大学)

“What can Japan’s history contribute to world history?”

☆ 午後の部(13:30-17:30)

・基調講演:羽田正(東京大学)「グローバル・ヒストリーと日本史」・研究発表:古瀬奈津子「東アジアにおける王権の古代から中世へ」、芹澤良子「衛生のグローバル化と日本」、本林響子「日本人の海外移住と日本語教育支援政策」(いずれもお茶の水女子大学)・パネルディスカッション(使用言語:日本語)、資料代500円。入構の際には、身分証明書等のご提示をお願いします。問い合わせ先:お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門 ccjs@cc.ocha.ac.jp。

◆ WERA・TOKYO大会での学会立案企画

2019年8月5日(月)~8日(木)に東京大学と学習院大学で開催される世界教育学会(World Education Research Association 2019: Focal Meeting in Tokyo)に、本学会から以下の内容でシンポジウムに応募し、受理されました。(日程・会場は2019年5月末現在未定)。詳細は、本学会HPをご覧ください。

**What is quality transition? Examination of transition from early childhood education to primary education from a historical perspective**

Chairs: Mikiko Tabu & Motoko Ohta

Discussants: Katsumi Yukawa & Fumiko Takada

Speakers: Sachiko Asai, Motoko Ohta & Ryoko Kodama

(会議使用言語:英語、大会詳細は:<https://wera-tokyo.com/>)。

\*同時開催の日本教育学会第78回大会 <http://www.jera.jp/>ともあわせ、ふるってご参加ください。

◆ OMEP「アジア太平洋地域大会」2019 in 京都

第二次世界大戦後のプラハにて平和の種を幼児の心に撒くことを誓って結成された OMEP(世界幼児教育・保育機構)は、当初より国連の乳幼児期のアドバイザリー団体として貢献し、昨年70周年、日本の加盟からも50周年を迎えました。この組織には70以上の国・地域が参加しており、各国内委員会が自主的に組織する研究交流活動をベースに世界大会と地域大会を重ねつつ、乳幼児期ならではの平和・子どもの権利・持続可能な開発をめざす世界規模での活動を推進してきました。さて本年9月に OMEP 日本委員会は、標記会議を京都市内でホストいたします。皆様の御参加を歓迎いたします(会員外の方も登録による参加が可能です、参加締切7月31日)。

**開催期間:2019年9月5日(木)、6日(金)、7日(土)**

**会場:京都テルサ(京都府民総合交流プラザ)** 会議使用言語:英語・日本語(発表・交流は英語)

**大会テーマ:Quality of ECEC(保育の質)** キーノート講演、APRシンポ、サブテーマ「SDGsとターゲット4.2」「子どもの権利」「遊び」「専門性の開発」「ESDの多様性」「福島保育」にもとづく分科会(ワークショップ・ミニシンポ・口頭発表)・ポスター発表、市内の保育参観ツアーもあり。詳細は以下のとおりです。

<https://www.omepjp.org/aprconference2019>

## 新入会員・会員異動 (2019.2~2019.5) (ご住所については省略しました)

### \*入会

今泉 良一 : 東洋大学 (院)  
平井 厚志 : 埼玉純真短期大学  
藤枝 充子 : 明星大学

杉山 実加 : 名古屋短期大学  
田中 謙 : 日本大学  
藤坂由美子 : 東京女子体育大学  
松川由紀子 : 元・中部大学 [※ご退職]  
松谷 和俊 : 中国短期大学

### \*異動

浅野 俊和 : 中部大学

## 寄贈図書 (2019.2~2019.5)

- ・荒井冽, 2018, 『保育のロマン街道』新読書社
- ・福元真由美, 2019, 『都市に誕生した保育の系譜: アソシエーションイズムと郊外のユートピア』世織書房
- ・OECD編 / 秋田喜代美・阿部真美子・一見真理子・門田理世・北村友人・鈴木正敏・星三和子 訳, 2019, 『OECD保育の質向上白書—ECECのツールボックス』明石書店

## 事務局からのお知らせ

### 1) 会費納入のお願い

本学会の会計年度は 10 月 1 日から翌年の 9 月 30 日までです。今回、振込用紙は、第 14 回大会年度 (2018 年 10 月 1 日 ~ 2019 年 9 月 30 日) とそれ以前の年度の会費が未納の方に、お送りしております。宛名シール上に記載された未納分年度をご確認のうえご納入ください。(振り込み用紙が入っていない会員は完納状態にあります。) なお、本状と行き違いでご納入の場合には、何卒ご容赦ください。

年会費: 一般会員 7,000 円、特例会員 (学生・退職者等) 4,000 円

送金先: 郵便振替口座番号 00190-9-73668、加入者名 幼児教育史学会

### 2) 「会報」への原稿募集

会報を通じた情報提供と交流をはかっています。会員からの研究情報、自己紹介、また、幼児教育史研究への提言、関連エッセイなどを事務局までぜひお寄せください。年 2 回の会報発行時までに届いた分を調整の上、随時掲載いたします。次回会報は 2020 年 2 月頃の予定です。

### 3) 所属・住所などの変更届け

変更が生じた場合は、メールにて事務局までお知らせください。

幼児教育史学会会報 第 28 号

2019 年 6 月 20 日

発行者 幼児教育史学会

〒 184-8501 東京都小金井市貫井北町 4-1-1  
東京学芸大学総合教育学系 福元真由美研究室気付  
幼児教育史学会事務局

E-mail: admin@youjikyokushi.org

郵便振替 00190-9-73668

編集 一見真理子 印刷 木元省美堂